

サントミュージゼ上田市立美術館の活動と 石井鶴三作品の収蔵について

中 村 美 子 （上田市立美術館学芸員）

はじめに

上田市は、「文化の薫る創造都市」の実現を図るべく、2014（平成26）年10月2日に劇場と美術館が併設された大型複合施設、上田市交流文化芸術センター及び上田市立美術館を開館した。本施設の基本理念は「育成」である。人口16万人の上田市に市立美術館を含む文化施設が出来てから2年半、当館の理念や特徴的な事業について紹介させていただく。あわせて、中心的な郷土作家の1人である石井鶴三（1887-1973）がコレクションとなった経緯について、若干触れてみたい。

1 人をつなぐ交流・文化施設

（1）“サントミュージゼ”とは

上田駅から徒歩7分、千曲川と北陸新幹線の間に広がる芝生広場から大きな弧を描いてそびえる建物。劇場と美術館が併設された大型複合文化施設の総称が「サントミュージゼ」である。館内は、上田産のカラマツの間伐材がふんだんに使用されており、広いプロムナード（通路）が劇場と美術館をつないでいる。2002（平成14）年7月、廃止が決定した日本たばこ産業㈱（「J T」）上田工場の跡地は、市民を含めた利活用の検討を経て、商業、公共公益、住宅の3



芝生広場から見た「サントミュージゼ」全景

つのゾーンに整備されることになり、市民会館の移転と新設の美術館を備えた複合文化施設が建設された。

愛称の「サントミュージゼ」の「サント」は、上田が製糸業で栄えたかつての“蚕都”と、降水量が少なく太陽(Sun)が“燦々と”降り注ぐ地であること、館の理念である文化を育て、人を育て、まちを育てるという3つの育成を目指す「3」が織り込まれるとともに、ミ

ューゼは、Music と Museum からなる造語である。総数 1,649 通の応募の中から選考で決定し、開館から 2 年が経過した現在、この愛称が定着しつつある。

(2) サントミュージーゼの理念

サントミュージーゼの基本理念は、次代を担う子どもたちの健やかな成長を願い、芸術を通じて心豊かな人間性を育むことにあり、さらに文化を育み、人を育み、まちを育むという趣旨を要約した「育成」が柱となっている。また、美術館における育成事業の背景にあるのは、山本鼎（1882-1946）が提唱し、上田の地から全国に普及した「児童自由画教育運動」及び「農民美術運動」である。この 2 大ムーブメントの根底を流れる「自分が直接感じたものが尊い、そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならない」という理念を継承し創造し続けていくという観点から「鑑賞事業」と「参加・体験型事業」を進めている。

2 上田市立美術館の特徴的な取り組み

(1) 「子どもアトリエ」と「お絵かきひろば」

1918（大正 7）年に上田市の神川小学校で行われた山本鼎の「児童自由画の奨励に就いて」と題した演説以降、学校の美術教育は、それまでの模写が中心の臨画教育から脱し、新しい美術教育を模索する全国的な運動へと発展した。現在では、子どもたち自身の感性を引き出すことを重視する自由画教育の考え方は、広く学校教育の現場に浸透している。

全国でも珍しい「子どもアトリエ」は、上田で発信した鼎の理念を具現化

し、子どもたちの豊かな創造性や人間性を育む環境づくりを進めるための場所として設置された。未就学児も利用しやすい水道施設やトイレ、床暖房を備えるとともに、可動壁を動かせば作品を展示することもできる。

屋外に設置した「お絵かきひろば」は、固定ボードと地面に大きく絵を描くことができる。

活動の実施にあたっては、主に市内の幼稚園、保育園の子どもたちを招いての創作活動や、前身館である山本鼎記念館から引き継いだ事業を含め、幼児から小中学生を対象とした教室等



屋外のお絵かきひろばで行った「えのぐであそぼう」

を実施している。また、「音のオーロラを描こう」（群馬交響楽団コンサート連携事業）など、劇場とのコラボレーション企画も行っている。

（２）地元の若手アーティストとのコラボレーション

開館から毎年、地域の若手アーティストが活躍の場を拓げるための支援を目的としての企画展を開催している。展覧会だけでなくアーティストと鑑賞者が直接出会えるギャラリートークやトークショー、ワークショップなどの関連イベントも、互いに新たな気づきや交流が生まれる重要な要素である。

開館記念事業として開催した「小松美羽展」は、坂城町出身で国内外を問わず幅広く活躍している彼女の国内初の大型展覧会となり、冬季にもかかわらず会期 28 日間で 6,091 人の来場者が訪れた。

2016（平成 28）年に開催した「越ちひろ展」は、キャンバスの枠を超え、壁画制作やライブペインティングなどのアート活動にも精力的な作家本人が、会期 45 日の内、週 3 日（延べ 19 日間）展示室内で「公開制作」を行い、横 7.2m、縦 2.7m の作品を完成させた。大画面が仕上がっていく過程が気になる来館者は、リピーターとなり何度も来訪した。

2017（平成 29）年 2 月には、上田市出身のアーティスト・白井ゆみ枝の「上田全天氣候展」を開催する。故郷上田の風土と気候を東西南北のイメージに重ねあわせて描いた大型作品を中心に、展示室を区切らず空間演出する。

なお、「鑑賞事業」と「参加・体験型事業」を柱としている当館では、企画展に併せてアーティストが学校に出向いてワークショップを行うアウトリーチを実施している。授業内容は、アーティストの個性によりさまざまだが、アーティストと子どもが授業で制作した作品は展覧会場に展示する。展覧会が始まると、授業に参加した子どもやクラスでの来館があるが、子ども達の多くが、会場を飾る自分の作品を指さし、自慢げに制作時のエピソードなどを語っている



越ちひろ展特別授業
「あっぷっぷプロジェクト×ART」

姿を目にする。こうした授業によって、アーティストとの触れ合いから生まれる発見や感動、子どもたち自らが表現者となることで感じる可能性を引き出していきたい。

（３）劇場×美術館のコラボレーション

開館から２年半の間には、劇場と美術館を備えた当館ならではのコラボレーションとして、音楽×美術、演劇×美術、ダンス×美術の融合など、展覧会や子どもアトリエ事業、アウトリーチ等でさまざまな連携を行ってきた。

中でも美術館にとって印象的な事業としては、2015（平成 27）年 12 月に開催した「高校生が創る実験的演劇工房 2nd どくりつ子どもの国」が挙げられる。この事業は、高校演劇班の生徒が演出家から指導を受け、ワークショップと稽古で作品を制作して公演を行い、表現を生み出す過程を、



中川賢一ピアノコンサート×
越ちひろのライブペインティング

劇場スタッフなどの運営サイドと共に学ぶことを目的としている。

2015 年の事業開催にあたり、演出家及び劇場・美術館スタッフが話し合い、作品制作及び発表の舞台を「美術館」と決めた。ワークショップと稽古は 10 日間、公演は 2 日間。高校生たちは、授業が終わると美術館に集まり、夜 21 時までの稽古を行うとともに、舞台の製作や衣裳の準備まで、舞台スタッフの援助を受けながら自分たちで行った。美術館では、館の管理とともに、物語の核となる「絵画」（複製画）を戦没画学生慰霊美術館の無言館から借用・展示し、舞台美術の一部を制作。美術館の企画展示室は 3 つに区切られ、それに合う舞台演出が設けられた。観客は、固定席で鑑賞するのではなく、絵本をめくるように、演者のスムーズな誘導のもと美術空間を移動し、4 つの場面展開で構成された物語の世界に浸った。



美術館で行った舞台「どくりつ子どもの国」

公演終了後は、環境を活かし、5日間だけであったが特別展を開催。稽古や制作に打ち込む高校生たちの写真とともに舞台美術のセットを一般公開した。まさに「実験的」と名のつくとおり、事前準備から本番直前まで、演出家×高校生×劇場スタッフ×美術館スタッフが絡み合い、空間全体に心を配る試みが行われた。

3 上田市立美術館の石井鶴三作品収蔵に関する経過と現況

(1) 上田市立美術館のコレクション

美術館を新設するにあたり、その柱となったのは、近現代美術の紹介であり、郷土作家の顕彰、作品収集、研究はその中核でもある。中でも、創作版画の父といわれる山本鼎、鼎の友人であり、彫刻家として上田で約半世紀にわたり彫塑講習を行い、また鼎の創作版画を実質的に推進した石井鶴三、上田市出身でアメリカで活躍した商業写真家ハリー・K・シゲタの3作家を特に重要な郷土作家として位置づけている。また、パリで評価を受けた中村直人、セザンヌのアトリエで制作を許された唯一の日本人画家・林俊衛など上田市出身の画家や、山本鼎の従兄弟で夭折の天才画家として知られる村山槐多、世界最大級の版画制作技術を確立した「森工房」制作のカトランやカシニョール、岡本太郎、池田満寿夫などの巨大リトグラフ等々からコレクションを形成し、特に「版画」のコレクションに特徴がある。

(2) 上田市と石井鶴三の関わり

1924（大正 13）年、長野県上田市で彫塑講習会が開かれることとなり、鶴三は、共に学ぶことを条件に講師を引き受けた。「手工教育」（現在の図画工作）において、著名な芸術家から立体造形の考え方や制作を教師たちが学ぶ目的で、小県上田教育会が開催し、鶴三に講師を依頼したのだ。翌年以降は上田彫塑研究会として毎夏開催され、全県下から鶴三を慕って受講生が集まった。鶴三は、1970（昭和 45）年まで、約半世紀にわたり上田へ指導に通い続け、受講生と共に制作した。《老婦袒裼》や《信濃男坐像》などは、この講習会で制作された名作である。

これら上田で制作された作品は、ブロンズ化され、小県上田教育会（以後、教育会）や上田市が所蔵している。上田市での石井鶴三の顕彰については、石井鶴三を彫塑講習会の講師として上田へ招聘した教育会が「石井鶴三美術館」（現在は石井鶴三美術資料室）を 1985（昭和 60）年に設置し、中心的な役割を果たしてきた。

(3) 上田市立美術館建設への小県上田教育会所蔵の石井鶴三作品寄託

2006（平成 18）年 5 月 11 日、上田市は教育会から新美術館の建設と石井鶴三の顕彰に関する要望を受け、同年「建設研究市民の会」、「山本鼎の会」、「東信（上小）美術会」、「上田彫

塑研究会」からも同要望を受ける。それ以来、上田市と教育会及び教育会常任委員会（石井鶴三担当部会）との打合せが頻繁に行われ、新美術館における鶴三作品と資料の取扱に関する検討を重ねてきた。

上田市では、石井鶴三を「特に重要な郷土作家」として位置づけ、美術館において常設作家として通年展示公開する一方、脆弱な資料類を十分な収蔵環境のもとで保存を図っていくこととした。美術館準備室が出来た 2013（平成 25）年以降は、作品・資料の活用についての計画が具体化し、同年 12 月教育会から「寄託」の意向が確認された。その上で、美術館準備室では、2014（平成 26）年 1 月から 4 月にかけて、絵画、素描、版画、挿絵について順番に作品調査を実施。同 7 月 23 日には、教育会所有の石井鶴三作品及び資料の上田市立美術館への寄託申し出があり、同 8 月 1 日付で 716 点の作品資料寄託契約を締結している。

（４）上田市立美術館の鶴三作品の収蔵点数

現在、上田市立美術館が収蔵している石井鶴三作品 743 点のうち、上田市所有作品は、彫刻 26 点と水彩 1 点のみで、ほとんどが教育会からの寄託作品である。調査で確認した 794 点（彫刻 28 点、絵画 42 点、素描 39 点、版画 148 点、挿絵 537 点）のうち、716 点について上田市が寄託を受け、一部を石井鶴三美術資料室でも展示することとなった。このことにより、教育会の「石井鶴三美術資料室」と上田市立美術館の双方での石井鶴三の顕彰が実現している。

[上田市立美術館収蔵の鶴三作品（743 点）]

油彩	14 点
水彩	7 点（1 点）
水墨、墨彩	4 点
版画	112 点
彫刻	40 点（26 点）
素描	29 点
挿絵	537 点

（ ）内は上田市所有、それ以外は小県上田教育会からの寄託。

（５）石井鶴三作品のモデルと対面したエピソード

2016 年（平成 28）年、サントミューゼのコンサート来館者が、美術館のパンフレットを見て、石井鶴三作品のギャラリートークに来館。その方は、今から 67 年前に鶴三作品のモデルを務めた女性であり、来場者一同が体験談を共有するという貴重な出来事があった。これは劇場と美術館が同居するサントミューゼだからこそ起きたエピソードである。

2016（平成 28）年 4 月 30 日（土）石井鶴三のギャラリートーク・作品鑑賞の最後に、鶴三が上田や長野で講習会の講師をしていたことに話が及ぶと、「実は私、鶴三の先生の作品のモデルになりましたの」と御婦人が口火を切った。その作品は、水彩画《少女シュミーズ》及びデッサン《シュミーズの少女》で、スリップを着た少女が椅子に腰をかけ顔を斜めに向けている。女性の名は、旧姓：前小屋津由子さん。以下、お話いただいた内容を記載する。

1949（昭和 24）年、石井鶴三が長野絵画講習会の講師として招かれた長野市の城山小学校で当時、13 歳であった前小屋さんが講習会のモデルとなった。担任で美術教師だった伊藤利夫先生（当時 30 代）から、モデルを頼まれ、「スリップを着て」という指示があったと思われる。スリップを買うお金もなく、自分でさらしを縫って作った。スリップ姿でモデルになることは恥ずかしいとも思わなかった。戦後で食べ物が少なく手足がガリガリだった。当時中学 3 年生だった池田満寿夫も伊藤先生の勧め（池田満寿夫の元担任で池田の絵画を評価していたからと思われる）で教員に交じって参加していた。担任からすごい先生のモデルになるのだと聞かされ緊張していたが、1 週間モデルを務めてみると、静かなしゃべり方、佇まい、受講している先生方が鶴三先生を尊敬している姿を見ても、子どもながらにすごい人だと思った。石井鶴三先生が出来上がったデッサンを「これもらってくれますか」と渡してくれたので、非常に驚いた。「はいよろこんで」と受け取ったが、あれほどの先生なのに、小さい子どもでも一人の人間として尊重する姿勢に大変感銘を受けた。以来、鶴三の佇まいや生き方が胸からはなれず、鶴三の生き方に薫陶を受けた先生方との交流が続いたという。

上記の内容から、鶴三と受講者、鶴三とモデルとの関係性が見えてくる。小県上田教育会が発行した『馬に夢をのせて－石井鶴三の生涯－』（P114－119）には、長野講習会のエピソードが書かれており、鶴三の言葉は「これをあげましょうか」となっているが、前小屋さんによると「これもらってくれますか」が正しいという。まさに相手の意思を尊重する鶴三の生き方が現れた一言である。「芸術は人間修行」といい、多彩な活動すべてに尽力を注ぎ、自身の生き方を制作態度で示してみせた鶴三。鶴三の指導を受けた教員たちが、子ども一人ひとりを人として尊重し、個性を引き出す指導が県下各地で行われた鶴三の功績は大きい。

おわりに

上田で始まった彫塑講習会は、現在、上田彫塑研究会と名称を変え、今日まで 90 年以上にわたり継続されている。また、石井鶴三友の会が主催する下母澤寛作石井鶴三挿絵の『父子鷹』の読み合わせ会が数十年にわたって開催されていることも驚異的なことである。山本鼎と石井鶴三という近代を代表する二人が蒔いた種が今なお根付いている上田。そこにできたサントミ

ューゼは、人と人がつながる化学反応を生み出す舞台装置としての役割を果たすことが、彼らから託されたミッションである。

参考文献

- 『石井鶴三全集』第2巻、形象社、1986年、P.414-418
『石井鶴三先生－信州上田と－』小県上田教育会、1974年
『馬に夢をのせて－石井鶴三の生涯－』小県上田教育会、2001年、P114－119
山本鼎「血気の仕事」『学校美術』第2巻第5号、学校美術協会、1928（昭和3）年、P40-41